

# 米国がルラに最も心配すること

スティーブ・エルナー ( Steve Ellner )

Znet 2022 年 11 月 4 日

## [What Worries the US Most About Lula - ZNetwork](#)

**ウクライナ問題での NATO の立場への反感によって、非同盟諸国の陣営拡大の基盤が広がっているが、今やその陣営の指揮を進歩的な人物が執る可能性がでてきた。**

ブラジル大統領選挙の決選投票でルラ候補が現職のボルソナロを破って当選した。その発表の数分後に、バイデン米大統領は「自由、公正、信頼できる」選挙だったと祝意をのべ、ルラを次期大統領と承認した。

識者たちは、バイデン政権のこの言葉を、"トロピカル・トランプ"と呼ばれるボルソナロよりもルラを応援している証拠だと解釈しているが、この推論は、完全な誤りではないにせよ、誤解を招くものだ。

ワシントンが実際にルラについて最も心配しているのは、強力な非同盟運動が再興することと、ルラのような進歩的な人物がその指揮を執る可能性である。ルラは過去 2 期務めた大統領任期中 ( 2003 ~ 2010 )、**「南の世界のスポークスマン役」**を自任していた。

その後、時代は変わった。イデオロギー的に多様な政府が増え、かつては米国のいいなりになっていた国が、今ではワシントンの命令に屈せず果敢に立ち向かい、非同盟諸国ブロックの拡大のための肥沃な土壌を作り出している。そしてこれらの非同盟諸国は、ウクライナに対する NATO の姿勢に反対して再活性化している。

中国、インド、南米、アフリカなど世界人口の大多数は対ロシア制裁に参加せず、連合して欧米に代わる新しい経済、金融、商業システムを形成しつつある。

さらに、世界の主要国、特に米国と西ヨーロッパがウクライナ紛争終結の合意を仲介することが全くできないこともあって、ルラのように、多様な政治的指向を持つ政治家との交渉を得意としてきた指導者が活躍できる場が広がっている。

## 外交政策が前面に

選挙でのルラの得票率は 50.9%、ボルソナロは 49.1%と僅差だった。ルラ政権の一期目と二期目と同様、次期政権下でもボルソナロの同盟政党を含む中道右派が議会を支配することになる。この不利なパワーバランスにより、ルラは選挙公約である富裕層への課税を緩和するなど、国内面では譲歩を迫られることは間違いない。

しかし外交政策は国内での圧力が少ないので、ルラはラ米地域と世界の問題で重要な役割を果たすという選挙公約を守っていかようとしている。サンパウロでの勝利演説でルラは、失われたブラジルの国際的地位を回復すると誓った。これはボルソナロが外交を軽視し、新型コロナ禍を中国のせいにし、2019年のアマゾン森林火災をレオナルド・ディカプリオのせいにするなど、とんでもない発言をした結果でもある。

ルラが 2003 年に初めて政権についた時、米国の支配層は彼を信頼できる穏健派であり、ウゴ・チャベスやエボ・モラレス、ネストル・キルチネルといった扇動政治家に対抗する存在とみなしていた。メキシコの元外相ホルヘ・カスタニェーダは、その有名な著書『Leftovers』の中で、ルラを冷静だと賞賛し、「ポピュリスト」で「反米」のチャベスらの「悪い左派」と対照的だと評価した。

しかしルラに対するこの好意的な評価は、2010 年に変わった。それは国内政策の結果ではなく外交政策、特に中東問題で、彼が 1967 年の国境線に基づくパレスチナの国家建設を承認したからだった。ルラにならって他の 6 つのラテンアメリカ諸国が同様の態度をとった。同じ年、ルラは(イランの)アフマディネジャド大統領と会談して同国の核開発を擁護したことで、「ワシントンに怒らせた」(ロイター通信)という。

その後、ルラは無責任なポピュリズムに対抗する現実的な左派としてではなく、むしろ彼自身がポピュリストと描かれるようになった。ウォールストリート・ジャーナル紙は、ルラが優位にたった 10 月 2 日の大統領選第一回投票についての記事に、「ブラジルの選挙でポピュリズムが勝利」と見出しを付けた。WSJ の編集者メアリー・オグラディは、「今、ルラ候補は再び穏健派を誓っている。彼の最大の政治的優位性は、慈悲深いポピュリストとしてのイメージだ」と書いている。

レトリックはポピュリズムの重要な要素だが、ルラの場合、米国が心配しているのは、彼が大統領としてとるかもしれない、米国の覇権に挑戦するような具体的な行動だ。この脅威は、BRICS と呼ばれる 5 つの強力な国家群に大きく起因している。ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカの 5 カ国である。

疑い深い米政府当局者や識者は、BRICS の首脳会議は共通点は何もない政府の「おしゃべりの場」に過ぎないと一蹴していた。当時のマイク・ポンペオ国務長官は退任時に「BRICS を覚えている？」とツイートし、インドとブラジルはロシアと中国を恐れているからこの組織は役に立たない、と述べていた。それから 2 年が経ち、ウクライナ（戦争がおき）、ルラが次期大統領となった今、その懐疑的な意見はまったく根拠のないものに見える。

ルラは 2018 年に、彼の支持者が言う、でっち上げの汚職容疑で投獄された。2019 年の刑務所でのインタビューで彼は、"BRICS は防衛の道具ではなく、攻撃の道具になるために作られた"と宣言した。今年、選挙戦の中では、BRICS だけでなく、ボルソナロが脱退した中南米カリブ海諸国共同体（CELAC）や南米諸国連合（UNASUR）といった地域組織にも言及したことで、このメッセージはさらに強まった。選挙勝利の翌日にルラと会談したアルゼンチンのアルベルト・フェルナンデス大統領は、「ルラとともに、われわれの BRICS 加盟に弾みがつくと述べた」という。

ワシントンは、BRICS の拡大を、ロシアと中国の加盟によって悪化した脅威とみなしている。ブラジル大統領選の終盤、全米民主主義基金（NED）はこう書いた。

「BRICS はアルゼンチン、イラン、そしておそらくエジプト、サウジアラビア、トルコにまで拡大することになっており、ロシアはさらに多くのパートナーを獲得することになるかもしれない。それらは世界の GDP のかなりの割合と世界人口の大部分を占める」

## ルラはどれだけ「中立」なのか？

ウクライナ紛争に対するルラの立場を、ワシントンは全く喜べない。彼は、BRICS が交渉による解決のための役割を果たすことを主張し、和平交渉の仲介を試みることを確約している。テレスルの報道によれば、ルラは「平和はパールのテーブルで達成できると言い、ブラジル駐在のウクライナ外交代表に不安を抱かせた」。

しかし、米国の政策立案者を夜も眠らせないのは、ルラがワシントンよりもロシアや中国に近い(実際そうなのだが)という恐れだけではない。ワシントンとは異なり、ルラはベネズエラの民主主義の正統性を認めている。ジャーナリストのベン・ノートンによれば、彼は、米国が承認したフアン・グアイドー大統領を「刑務所に入るべき戦争挑発の犯罪者」だと地元メディアに語っている。

選挙前夜、ルラは英誌エコノミストに「人々はニカラグア、キューバ、ベネズエラのことばかり言っているが、カタールのことは誰も言わない。誰も米国について語らない」とのべている。

## BRICS 通貨

ルラは 2016 年に労働者党が政権を失って以来、BRICS の大きな欠点はドルに対抗する新しい通貨を打ち出せなかったことだと主張してきた。彼は刑務所からのあるインタビューで、「私が新しい通貨について議論したとき...オバマは私に電話をかけてきて、『新しい通貨、新しいユーロを作ろうとしているのか』と聞いたので、私は、『いや、米ドルをなくそうとしているだけだ』と言った」と回想している。

BRICS の準備通貨をつくる構想は、2022 年に、より有望になり、加盟 5 カ国がその構想に賛同している。実際、今年、BRICS5 カ国の通貨の業績はすべてユーロを上回っている。

ドルを政治的武器に使う米国のやり方は、ロシアや中国といった超大国との対立を超えて、キューバ、ベネズエラ、イラン、ニカラグアを含む「南の世界」の人々に悲惨な状況をもたらしている。

## 一極対多極

ルラがしばしば口にする「多極化する世界」という概念は、非同盟諸国を含む多様なブロックの出現を想定している。安全保障の専門家であるシブシャンカール・メノナー氏が今夏のフォーリン・ポリシー誌に寄稿した記事には、以下のよう、ワシントンの多くの人びとがもつ非同盟への警戒感が反映されている。

「国際システムが破綻し、あるいは存在しなくなれば、指導者たちが非同盟に目を向けるのは当然である。米国、ロシア、中国、その他の大国が他国に圧力をかけてどちらかを選べと迫れば迫るほど、それらの国は戦略的自律性に引き寄せられ、各国が外部依存を減らし、自国を固めることで、より貧しく、より残酷な世界を作り出す可能性がある」。

左派の中にも不安を持つ人たちがいる。長年の政治活動家であるグレッグ・ゴデルスは、多極化を「国際関係の力学を理解するツールを探していたブルジョア学者が最初に論じた概念」と呼び、「冷戦後の一極世界に出現したり挑戦したりする極が、単に代替極であるという理由で、前進したり後退したりする保証はない」と付け加えている。

BRICS にインドのナレンドラ・モディという人種差別主義者の政権が存在し、サウジアラビアが参加を希望していることは、この組織の進歩性に疑問を投げかけている。

サウジアラビアは最近、石油を増産して国際価格を引き下げ、ロシアへ打撃を与えてほしいとのバイデン米大統領の嘆願を拒否し、米国に反抗するという驚くべき決定を下したが、だからといってこの国が反動的でなくなることはないだろう。しかし、まさにそれ故にこそ、ルラのような進歩的な人物が世界レベルでリーダーシップを発揮することが重要であり、ワシントンに警戒を呼び起こしているのである。

非同盟運動（NAM）は 1950 年代にチトー、ナセル、エンクルマといった社会主義に傾倒した左派の指導者たちによって創設された。この運動は、脱植民地化、軍縮、人種差別やアパルトヘイトへの反対を掲げ、重要な役割を果たした。NAM はまだ存在するが、この運動が連携しなかった 2 つの大国のうちの 1 つであるソ連はなくなった。米国だけが残っている。ルラは米国への批判を隠していない。米国の捜査当局がブラジルの検察当局と協力して自分を投獄したという疑惑さえもっている。その疑惑は、ニュースメディア『Brasilwire』によって十分に立証されている。

ルラは、2018 年のメキシコでのロペス・オブラドールの勝利を皮切りに、ラテンアメリカを席卷している進歩的な潮流のリーダーとなる覚悟ができています。

真の問題は、政治領域を横断して米国の覇権に挑戦する世界的な動きの拡大の中で、ルラが多極化の進歩的ブランドを掲げて指導的役割を果たし、その政治的手腕を試すかどうか、それにワシントンがどう反応するのかである。

（了）